

武田泰淳「日本文学的命運」の紹介と翻訳

——上海における日本人居留民の中国語評論——

藤原崇雅

解題

武田泰淳（一九一二—一九七六）は、第一次戦後派の作家として知られるが、戦時下から敗戦直後にかけてはむしろ、『司馬遷』（一九四三、日本評論社）を著した中国文学者として知られている人物である。茅盾『虹』（一九四〇、東成社）をはじめとした現代文学の翻訳や、竹内好が組織した中国文学研究会の機関誌に発表された業績が認められ、上海から帰国した後は一時、北海道大学に新設された法文学部に、教員として赴任したこともある。その職は半年で辞し、職業作家として自立の道を辿ることになるのだが泰淳は当初、中国文学研究者として世間に認知されていたのである。

泰淳の研究を下支えしたのは、語学のリテラシーである。川西政明「武田泰淳年譜」（『武田泰淳伝』一〇〇五、講談社）によれば、泰淳には潮江院住職である赤尾光雄という中国語や中国

文学に詳しい従兄がいた。泰淳は一六歳頃、光雄を通じて中国語に興味を持ちはじめた。そして一八歳になると、本郷区金助町にあつた私立第一外国语学校の夜間部に通いはじめ、その後、東京帝国大学の支那文学科に進学した。「古典の再評価」（『文芸』一九五五七）には、「老先生は蒙古系の北京人で、たつた二十九かいあつて、その美しい発音を聴いてゐるあいだだけ、戦争も何も忘れていらされた」と、中国語を熱心に学習していた当時が振り返られている。大学はすぐに中退してしまった泰淳だが、それはあくまでも授業に熱心になれなかつただけで、語学に対する興味関心はその後も把持されていたものと思われる。そのリテラシーを活かし、泰淳は敗戦後の上海において、日本人が国民党政府系の機関に提出する書類を代理で作成する、いわゆる代書業を営んでいた。同時期に外地に滞在した堀田善衛は「上海時代」（『海』一九七六・一二）で、「虹口地区にみんな集

中されて、今度は「日僑」という腕章をつけなきやならなくなつた」とき、「印刷屋が接收されることになつて、いろいろな書類がいる」ようになり、そこに下宿していた泰淳が「中国語」で「おじさんのために書類を作つてあげ」たことを回顧している。噂を聴きつけ、「いろんな人がやつてきて、接收関係の書類」の作成を依頼されたことから、泰淳は代書業を営むに至つたのだ。

泰淳が代書業をしていたことは、上海を舞台とした私小説的な作品の設定として反映されていることから比較的よく知られている。たとえば「審判」（批評）一九四七・四では、「中国側に提出する書類の数は多く、代書商売は案外に繁盛した。工場の閉鎖、商店の接收、帰国の手続きなど仕事は絶えなかつた」とある。ただし、「審判」をはじめとした上海ものの作品論的研究は多くあるものの、泰淳が実際に代書ができるほどの語学力を身につけていたのかどうかについては、これまで考察されてこなかつた。その理由は、泰淳が中国語で書いた文章の存在が明らかになつてこなかつたためである。たとえば、筑摩書房から刊行されている全集には、日本語で書かれたものしか収載がない。

しかし、稿者が中華民国期に刊行された雑誌のデータベース「大成老期刊全文数据库」を調査したところ、泰淳が中国語で書いたと推定される評論として「日本文学的命運」（日本文学の命運）（『遠東觀察者』一九四六・四）を確認した。この評論は

泰淳の語学力を確認するうえで、重要なものと考えられる。本稿では、「日本文学的命運」を翻訳・紹介することで、研究において看過されてきた中国語リテラシーの水準を詳しくしたい。

「日本文学的命運」が発表された雑誌『遠東觀察者』は、上海で刊行された中国語の資料で、現在創刊号だけ確認が可能である。一号以降については、発行されたかどうかも含めて分かつていい。表紙には「遠東諸問題之研究批評与紹介」「極東の諸問題の研究批評と紹介」とあり、上海を中心としたアジアの政治問題について批評、紹介することを主旨とした評論誌であることが窺える。一九四六年四月一〇日発行で、編集兼発行人は遠東觀察者月刊社、印刷社が改造日報社となつている。遠東觀察者月刊社については不明だが、改造日報社は比較的有名で、国民党第三方面軍の將軍で、上海統治のトップであった湯恩伯（タシングボウ）によって、日本人居留民の思想防共のために組織された新聞社として知られている。居留民の思想を緩やかに統制するため、『改造日報』や、『改造週報』、『改造叢書』、『改造評論』など、さまざまな日本語の刊行物を公にしていた。同出版社で印刷されていいたとするならば、『遠東觀察者』もまた、国民党政府系メディアの一つと捉えて差し支えない。

『遠東觀察者』の「稿約」欄を確認すると、第五条に「訳稿請附原文、否則註明原稿出處」（訳稿には原文をつけること、

さもなくばその出所を明記すること」とある。中国語の雑誌であるため、訳稿とは他言語から中国語に訳された文章のことである。つまり、この雑誌は他言語で書かれた意見を現地の中国人に向け紹介する目的をもつて刊行されたと考えられる。当該の号で「日本人論日本—特輯（日本国内及在華日本人特稿）」「日本人が論じる日本—特集（日本国内および在華日本人による特稿）」

が組まれてることからも、この方針は明らかだろう。ちなみに、「日本文学的命運」もこの特集文献のひとつとして収録されたものである。猪俣庄八「後記」『中国文学』一九四六・五に「武田泰淳が三月下旬、上海から帰つた」とあるため、泰淳は同年三月まで当地に滞在していたと考えられる。泰淳は上海時代最後の仕事のひとつとして、評論を書いたのではないだろうか。

特集「日本人論日本」には青木恵一「關於絕對制的一個覺書」〔絶対制についてのある覺書〕、森戸辰男「向民主主義前進」〔民主主義への前進〕、中村静治「日本經濟之再建」〔日本經濟の再建〕、武田泰淳「日本文学的命運」〔日本文学の命運〕、谷川勉「東京的反常」〔東京の普段との違い〕の五編が収録されている。これら文献の末尾には、基本的にはどの記事も翻訳者名が記される。たとえば青木恵一の文献には「一九四六、三、二二雨鶴訳」である。このことから、日本人の書いた原稿は基本的に中国語に翻訳後掲載されていることが窺える。

ただし五編のうち、泰淳の文献にだけ、訳者名が記されていない。したがつてこの評論は翻訳する必要がない、もともと中

国語で入稿された記事だと推定される。もちろん、執筆や推敲の過程で、中国語話者に援助された可能性もある。しかし、代書業を嘗んでいた経験と合わせると、評論が中国語で書かれたとしても、不思議ではない。以上の掲載状況から、「日本文学的命運」を泰淳が中国語で書いた評論と判断した。

研究者であつた泰淳は、小説と同時に多くの評論を残している。中でも「中国文学の命運」〔文明〕一九四六・八は、タイトルからいつても内容からいつても、またほぼ同時期に発表されている点からいつても、「日本文学的命運」と関連した業績と考えられる。これは、中国の現代文学に関する評論で、郭沫若や林語堂といった作家の作品が、日本の現代文学とは驚くほど違つた作風を示していることを論じたものである。この中では、「中国文学が日本文学とかぎりなく離れてゐたことを、その「命運」と言つて見たまでである。離れていたことの意味は、しかし深いのである」と述べられる。そのうえで泰淳は、中国の現代文学の特徴を政治主義としつつ、中には政治的なテーマでは説明しきれない生活感情が含まれることがあることを述べ、その要素を中国現代文学の可能性と分析している。

また、現代中国の文学史的記述と併せて、泰淳は日本文学についても記述している。「今となつて見れば、日本文学は、やつぱり驚くほど世界から孤立した特殊美であつたから、それが二二十数年、中国芸芸と離れてゐたとて、別段不思議でもない

けれど。やはりここには、両国の文学の命運を考えさせる暗示がある。政治主義的な中国文学とはうつて変わって、日本の現代文学は、政治から乖離した特殊な美の表現に終始したと、泰淳は分析する。日本の文学者は時局と対決するのではなく、自分と周囲の極限された範囲に創作の対象を絞ることで、政治とはかけ離れた美的な表現を生み出してきた。泰淳は日本現代文学の主流をそのように位置づけたうえで、中国文学と日本文学を、正反対の行き方をした領野だと考察している。泰淳は両国の文学を、別種の命運を辿りつつあるものとして捉えていた。今回紹介する「日本文学的命運」は、「中国文学の命運」の中で言及された日本文学の特質が、具体的にどの作品から発想されているのかを確認できる点で貴重である。詳しくは以下の訳文に委ねるが、泰淳は日本文学の代表的なものとして、川端康成「伊豆の踊子」や「名人」、また堀辰雄『大和路・信濃路』、さらに谷崎潤一郎『細雪』などの作品を想定している。同時に泰淳は、中野重治の転向文学も大きくとり上げている。それらの文学は、政治主義からの挫折や逃避であるのだが、挫折や逃避せざるを得なかつた状況を対象化している点で、看るべきところがある。泰淳は日本文学について、政治主義的になれない点を当時の政治状況の反映と理解する、一種逆説的な評価を試みているだろう。

そして評論は精力的に作品を発表していくことになる泰淳の、今後を予見したものとして読むこともできる。今後の戦後文学

における題材として原子爆弾や天皇、餓死を扱うことが提案されているが、泰淳は「ゴジラの来る夜」『日本』一九五九・七)や、『貴族の階段』『中央公論』一九五九・一・五)、また「ひかり」『新潮』一九五四・三)によって、それらの主題を追求している。

さらに重要なのは、「敗戦」というのは、けつして言葉や概念ではない。それを長編の政治論文のテーマとして書いてはならない。それは凹凸や傾斜、また陰影や断層などに満ちた不平等で不統一の現実なのであり、作家にとって非常に恐ろしく、眞実の文学において日常へと限りなく近づくことなのだ」という一節だろう。泰淳は戦前期から開始していた小説の創作に、戦後において本格的にとり組んでいくが、そのときとられた方法は、上海体験を私小説に似た形式で書く、というものだった。『審判』や『蝮のすゑ』『進路』一九四七・八、一九四八・二)、また、「非革命者」『文芸』一九四八・五)では、紛れもなく上海における自己の「現実味のある文学的日常」を描くことが作品において試みられたのである。

こうした創作の方法が、中野重治に代表される転向文学への積極的な評価から導き出されていたということが窺える点で、本評論の資料的価値は極めて高いと考えられる。「日本文学的命運」は、外地で生活した居留民による文学史的記述としてはもちろん、戦後文学者として成熟していく泰淳のその後の主題を説明したものとしても、貴重な資料なのである。

凡例

一、漢字は、原則として簡体字や繁体字ではなく、日本で通用している新字体で統一し、異体字なども通例の字体に直した。
一、句読点、括弧、改行は原文通りの表記とした。ただし、括弧の用法が明らかに誤りと認められる場合には、「ママ」のルビを振り原文そのままであることを示した。

一、判読不明の箇所については、一字分を□で示した。

一、原文中、具体的な作品名や、歴史的な事象に言及があつた場合は注を付した。

一、文脈上明らかに誤りと認められる場合には、原文に「ママ」のルビを振つたうえで、妥当と考えられる漢字を充てた意味に直して訳出した。

一、訳文に關しては、現在通用している書法によつて筆記した。他作家の小説が引用されている部分についても、読みやすさを優先し、同様の書法によつて筆記した。
一、原文中、他作家の小説が引用されている部分は逐語訳するのではなく、もともとの小説における表現を充てた。ただし、一部改變した箇所については特記している。

微妥協一点、把伏字減少一点就好了。但那「高吉却不能苦笑。他只感到「討厭什麼，蠢才……」強烈的感到批評家的好意和同情。批評家誤解了。高吉的小説中決沒有過激的文句。講到有沒
有妥協的話，他如今顯然是和支配者們妥協了。他不過想写自己如今如何妥協，為何至於屈服。他相信並感覺到人類的屈服着羞醜。^(マヌカ)

さいきん中野重治の「小説の書けぬ小説家」を読んで、彼の文学者らしい潔癖について非常に感動した。この小説家は転向によつて出獄できたものの、政府の厳しい監視を受け、作品発表が極めて困難になつていて。批評家たちは高木高吉のすこしも妥協しないところを評価しつつも、伏字を減らせばよくなると述べている。しかしそのとき、「高吉は苦笑することはできなかつた。彼は「何をいやがる、ぬけ作奴……」と感じる一方で批評家の好意と同情とを強く感じた。批評家は誤解しているのだつた。高吉の小説には過激な文句なぞは決してなかつた。ただ彼は、自分が今どう妥協してゐるか、どうして屈服するようになつたかを書きたかつた。彼は人間が屈服することの醜さを信じ感じていた」のである。

翻刻資料

最近讀到日野重治的「不能写小說的小説家」⁽¹⁾，對於他那文学家似的潔癖甚感感佩。這位小說家當時以転向而得出獄，受官方的嚴格監視，發表作品極為困難。批評家們批評着說那高木高吉稍

不管批評家對於自己寄与怎樣奇妙的同情，不管社會賜以怎樣寬縱的好意，他只相信並感覺屈服的羞醜。他的潔癖使他甚至連苦笑也不可能。對於自己，對於同志，他的好惡都過於明確，是不能糊弄欺騙的，因此他感覺並判断伙伴們的一舉手一投足。

批評家が彼についてどんな奇妙な同情を与えるよりも、社会がどんな勝手な好意を授けようとも、彼はただ屈服することの醜さを信じ、また感じていたのである。潔癖は彼に苦笑させることがえ不可能にした。自己や同志に対しても、好惡はすでに明確であるため、ごまかしあざむくことは絶対に不可能であり、それゆえに彼は仲間の一挙手一投足から何かを感じ、判断している。

「我們出来了。我^{ママ}本能了解他們。他們是多麼煥發呀！他們中間，例如M是怎样包围在花裡面呀！他到底為什麼跑到俄国去學習呢？這個村子是多麼美麗呀！但他們仍是卑鄙的。至少S是卑鄙的。就是M的精神煥發也和卑鄙少不了關係。不，也許不是卑鄙，但和我們是不同的」⁽³⁾〔一個小記錄〕

「私たちはず外へ出た。私には彼らの人間がわからなかつた。彼らは何と明るいだらう。彼ら、たとえばMはなんと花に囲まれてゐるだらう。彼はいつ何しにロシヤへ勉強に行つたのだらう。なんとこの村は……これは村だ！……美しいだらう。しかし彼らは……卑しいぞ。すくなくともSは卑しい。Mの陽気だつて卑しさに關係してゐるんだ。いや、卑しくはないかも知れぬがおれたちとは別だ」〔二つの小さい記録〕

從這個小說集出版到現在已經十年了。⁽⁴⁾ 而他拵説被推為某黨議員候選人。⁽⁵⁾ 上海的報紙也登載了這個消息，⁽⁶⁾ 人們簡單

的談到「是麼，中野重治做了候選人麼」，而嘆息人世的變幻無常。但對於文學家中野，事情並本如是簡單，也不是感傷的。彼一定依舊蹙眉迴視，認真的說「他們是卑鄙的。不，也許不是卑鄙，但和我們是不同的」。喫了敗仗就是喫了敗仗，世界有了變動就是有了變動，他用過於明確而不能糊弄欺騙的好惡之念來感覺並判斷戰爭の一挙手和世界的一投足。他的黨派也許會急速拡大勢力，他的政治地位也許出乎意料之外的變得重要。但為作家的他却執拗的發出小孩子似的低語說「我不能了解他們」，以潔癖為武器來掘發，深化或高揚自己的小說。這乃是「不能寫小說的小說家」的命運。

この小說集が出版されてから、現在すでに一〇年が経つた。彼は聴くところによれば推薦されて、某黨議員の候補者になつたらしい。上海の新聞もこのニュースを掲載したため、人々はいつも簡単に「そうですか、中野重治が候補者になつたんですか」と話している。世の中の移り變りの速さにはため息が出るほどだ。しかし、文學者の中野にとつて、ことはさほど簡単ではなく、感傷的なものでもない。彼はおそらく相も変わらず眉をしかめて周囲を見ており、眞面目に「彼らは卑しいが、しかしあれたちとは別だ」と言つてゐるはずである。敗戦は敗戦であり、世界も変動したにはしたが、彼は極めて明確なごまかしあざむくことのできない好惡の念をもつて、戦争の一挙手と世界の一投足について考え方としている。彼の黨派はもしかすると急速に勢力を拡大し、彼の政治的地位は思いの外、

重要なものに変わっていくかもしれない。しかし、作家としての彼は却つて執拗に、子どもに似た低い声で「私たちは彼らの人間がわからなかつた」と言い、武器としての潔癖をさらに発掘し、自己の小説を深化また高揚させていくだろう。これこそ「小説の書けぬ小説家」のたどる命運なのである。

世界情勢對於日本作家究竟是怎樣的東西呢？一句話，那是文学的常事，夏目漱石、森鷗外、永井荷風也都被放在「世界情勢」前面站着，而生活在那裏面，他們雖沒有特別帶着暴燥的声音跪上講壇，但他們從海外回來之後各以自家的潔癖明示了火傷的傷痕。精通英國文學史，寫了「倫敦塔」的漱石，編寫暗淡的心理小說，想穿了日本的家庭生活，是什麼原故呢？那樣透澈理解德國医学和歐州文芸的鷗外，埋頭著作以那樣特別的日本中世為題材的歷史小說，是什麼原故呢？馳心於「美國故事」、「法國故事」等優美的異國浪漫中的荷風，為什麼傾向於那樣的江戸趣味，傾向於那樣受限制的近代日本都市的奇怪美了呢？那乃是由於

世界情勢對於他們是文学的常事的原故，他們好像沒有厚皮膚以撇開日本的文学的常事去考慮世界。他們也許迷惘過，但一次也没有転眼他顧。

把中野的話再引用一次罷。／「他想振作威勢，把永井荷風的作品抽出来閱讀。永井荷風的作品很好。但是陳腐。他抽出鷗外的作品來讀。鷗外的作品雖新鮮，但是生硬，他隨手抽出雜誌來

これまでの日本作家は世界情勢に對して、どのような態度をとってきたのだろうか？この問いには、世界情勢を日常として文学で描いた、と答えることができる。夏目漱石や森鷗外、また永井荷風の全員が「世界情勢」のまえに立たされ、またその

中で生活をし、彼らは登つた演壇のうえで特別に荒々しい声をあげることはなかつたけれども、彼らが海外から帰つてきたあと、自分たちそれぞれの潔癖で火傷のあとを明示してみせた。英國文学史に精通し、「倫敦塔」を書いた漱石が、暗い雰囲気の「心理小説」を創作し、日本の家庭生活を見通そうとしたのはなぜだつたのか？ドイツの医学と歐州の文芸について透徹した理解を示した鷗外が、特異な日本中世を題材とした歴史小説の著作に没頭したのはなぜだつたのか？『あめりか物語』や『ふらんす物語』など優美な異国ロマンに心を馳せた荷風が、どうして江戸趣味という限定的な近代日本都市の奇怪な美の方へ傾いていったのか？それは世界情勢が文学的な日常の中に繰り広げられていたからであり、彼らは日本文学における日常的な話題を捨て置いて、世界の考慮を繰り広げるほど厚顔ではなかつたのだ。彼らはずいぶん途方に暮れつつ、しかし決して目を周囲へと逸らさなかつたのである。

手庸的小説也可以稱為小説，他感到發生了勇氣，而即刻又感到這件事的可憐」

中野の話しをもう一度引用してみよう。／「彼は威勢をつけ

たくて永井荷風を引き出して読んでみた。永井荷風はうまかって。しかし古臭かつた。彼は鷗外を引き出して読んでみた。鷗外は新しかったけれども固まっていた。彼は手あたり次第に雑誌を引き出してやくざな新進作家たちを読んだ。どれも下手でたわいがなかつた。そうして、そういうやくざな小説が小説で通つているのに元気づけられるのを感じ、すぐまたそのことの切なさを感じた」

在昭和十一、二年前後、新進作家們は平庸的、他們沒有力量使文学的常事結晶成不為世界情勢所嚇倒的自己革新、因此一個一個都拙劣而不值一讀。但荷風雖陳腐却很好、鷗外雖生硬却新鮮。這很好和新鮮並不是小小的技巧技術問題。那是觸到精神深處的、所謂内心表現問題。

昭和一一、一二年前後における新進作家はやくざで、彼らは世界情勢に圧倒されないよう自己革新を起こして文学の日常に結晶させるだけの力量がなく、したがつてひとつひとつの作品は拙劣で読むにも値しない。荷風は古臭いが却つてうまく、鷗外は固まっているが新しい。このうまさや新しさは、微細な技巧技術を問題としているのではない。それは精神の深い部分に触れているか否か、いわゆる内心表現の問題なのである。

目下日本在全世界成了戦敗、屈辱和絶望的處所。在日本国内、無論古代、中世、近世、由於内戦内乱的結果、我們的祖先曾嗜

過種種的戦敗、屈辱和絶望。但那些戦敗、屈辱和絶望乃是無人注意、無人知曉的、它們發生在世界史中最偏僻的處所、而且是在蔭避的洞穴中。但這一次不同了、這一次世界的陽光毫不客氣的照射到國內來。不管什麼樣的排外者、什麼樣的保守主義者、什麼樣的厭世主義者、世界舞台的鈴兒都会在他們耳邊發響、催他們快登舞台、對於日本人、偶然而又必然的驚異之幕業已打開、這是無可疑惑的。尤其是文学家坐在最前排、正当着從後台吹過來的寒風和舞台上的塵埃。無論怎樣平庸的作家、怎樣拙劣不值一讀的作家、要想把眼睛転開不看劇的進行是不可能的。

さしあたり日本は全世界において敗戦し、屈辱と絶望の場所にいる。日本国内においては、古代・中世・近世と、内戦内乱の結果によつて、私たちの祖先はかつてさまざま敗戦、屈辱と絶望を味わつてきた。しかしこれらの敗戦、屈辱と絶望には誰も注意せず、誰も知らなかつた。それは世界史における最も辺鄙なところで發生していだし、薄暗い洞穴で起きたことだつた。しかし今度の敗戦は異なつてゐる。今度のそれは陽光のようす、すこしの遠慮もなく国内を照らし出してしまつた。どんなに排外的な者でも、どんなに保守主義者であつても、どんなに厭世主義者であつても、世界の舞台上で開演のベルがすでに耳元で鳴り響き、彼らが舞台に速く上がるよう急き立てる。

日本人にとって、偶然また必然的に驚くべき幕が開いたことに關しては、もはや疑う余地はない。特に文学者は舞台上、最前列に並ばされ、ちょうど樂屋の方から吹いてくる寒風と塵埃と

に体を洗われている。どんなにやくざで拙劣な一読に値しない作家が、劇の進行を見ないようにして目を逸らしたくなつても、それはもはや不可能となつたのである。

日本は絶対打敗了。国民一斉都浸在戦敗の水中、直到頸根。戦敗並不是一句話、也不是概念。它不能僅是写長篇政治論文的題目。那是一種充^{マダ}凹凸、傾斜、陰影、断層等不平等、不統一的現実。它對於作家們成為非常可怕、非常眞实的文学的常事而近迫。

日本は絶対的に打ち負かされた。国民は一斉にみな、敗戦といふ水の中に首の根っこまで浸されている。敗戦といふのは、けつして言葉や概念ではない。それを長編の政治論文のテーマとして書いてはならない。それは凹凸や傾斜、また陰影や断層などに満ちた不平等で不統一の現実なのであり、作家にとつて非常に恐ろしく、眞実味のある文学的日常として迫つてくる。

子爆弾は一瞬のうちに全市の住民を死滅できる。死は人間に對して、完全に物理学的かつ平等である。しかし、彼ら文学者がたつた一秒間で死にゆく人を見る場合、背中は炸裂してひつくり返り、体液が流逝し息が絶える等々のことは個別の事実としてある。彼らにとつて原子爆弾の威力は政治問題の手前にあり、文学においては日常の中に表現されるのだ。であるから彼らは、進んでそれを具体的に見るほかない。

餓死不待説将影響日本文学。对自己、对社会、餓死的迫來都有深刻的意味。但餓死之政治的意味只是政治的意味、不改变是不能成為文学的。説餓死不是平等的而發表政見、發表政見的本人可以成為現代日本小說的登場人物，只不過這一点可以稱為文學的現実。在餓死狀態的繼續期中，可能有某種文学家「相信並感覺到人類屈服的差醜」，一定会低声說「我不能了解他們」，睜開臨終的眼再来好好看看。他們恐怕把最複雜的東西也看丢了，站在最單純的滿足、瓦礫的荒野中。

文学家、因潔癖而受火傷的人們、不管是昨天、今天、明天，都應該注視。原子弹可以在一瞬間使全市住民死滅。死對於人類是極合物理而平等的。但他們會看到死的人有一秒間死去的，有脊背炸裂而栽倒的，有髓漿流出而断氣的等等微細的個別事実。對於他們，原子弹的威力在成為政治問題之前，也是文学的常事。所以他們最具体的去看它。

文学者は潔癖で火傷を受けた人々であるため、昨日と今日、また明日にかかわらず常に注視しておかなければならぬ。原

要がある。文学的な現実と称することができるのは、そのよう餓死は政見を發表するように平等に話題にするだけでなく、發表された政見の中の当人を現代日本の小說の登場人物とする必

いたならば、「人間は屈服し醜いものであることを信じ感得する」べく、「わたしは彼らのことが分からぬ」と確かに小声で述べ、もう一度外界をよく見ようと臨終の眼を開こうとするべきだ。彼らは最も複雑なことの見落としを恐れつつ、最も單純な満足を抱きながら、瓦礫の荒野に立つ。

這比較議論天皇制廢止論更正当得多，因而也費事得多。對於他自己，比一般存廢論更深刻而又複雜的人間論有發生的可能。「人類似複雜而無弁法」的苦痛會磨練他那好惡頗強的潔癖，使他創作出更強韌，更廣闊的小說世界。因為那時候他已經達到一種地位，能够站在私人小說的傳統上，握個人的追求転化為社會總現実的追求。

無弁法の人」。這是當戰爭中他在一個從擾的意思講富於政治臭味的演說會上所講的話。⁽¹⁰⁾在那個時候，對於人的處理是極其簡單的，一無所知的官僚的命令有左右文學的局勢。也有一些文學家想握無聊的宣傳概念加以進一步的擴大。小林的潔癖似乎不能再忍受這樣的事了。因而遂在最不相稱的席上漏出了純粹的話。

二、三年前、評論家の小林秀雄が「作家は人間を複雑で仕様がない人間と捉えるものだ」と、かつて述べたことがあった。これは戦争中、政治の香りのきつい演説会で、彼が抱いた面白い思いが豊かに述べられた言葉である。當時、人の処し方

はごく簡単で、何も知らない官僚の命令によつて文学が左右された時局であり、つまらないプロパガンダの概念を、一層広げようとした文学者がいた。小林の潔癖は、このような事態にものはや耐えることができなくなつた。したがつてすぐ、最も似つかわしくない席上において、純粹な言葉を漏らしたのだろう。

もしかするとある日 誰かが人間としての天皇を小説に書くかもしれないと私は思う。作家にとって、これは天皇制の廃止論を議論することより正当で、そして面倒なことである。このとき作家自身は、一般的な廃止論よりも、さらに深刻で複雑な人間論を産みだすことが可能になる。「複雑で仕様がない人間」がもたらす苦痛は作家の好惡のはつきりしたところの強い潔癖を鍛え上げ、さらに強靭でさらに広闊な小説世界を創造させるそのため彼はすでにある地位に到達し、私小説の伝統のうえに立ち、個人的な追求が社会における現実すべての追求に転化するよう書くことができるのだ。

今後的日本作品究竟會那一個方向作強韌而廣闊的成長呢？首先那不會依靠作品的題材，而是要依靠作者內心的寬廣與深遠，依靠所謂驚訝。關於原子弹的，關於天皇的，關於餓死的，總之關於戰敗的文學，其產生並不由於對象，而由於凝視對象的作家如果不感到誘發內省的驚訝，會看不見任何東西的。如果沒

有這寶貴的驚訝，任何人世間的變貌也不会使他自己變貌的。

今後、日本の作品はいつたい、強靭で広闊な成長を遂げる方向へ成長できるだろうか？まずそれは作品の題材の問題ではなく、作者が広く深い心を持つてはいるか、いわゆる驚きを感じているかどうかという点が問題になる。原子爆弾にしろ、天皇にしろ、餓死にしろ、敗戦の文学はすべて、対象によって生み出されるのではなく、対象を凝視する作家によって生み出されるのだ。作家がもし内的な驚きを感じられなければ、いかなるもののが見ても難しい。もしこの大切な驚きを感じ得ないならば、いかなる世の中の変貌をもつしても、自己を変貌させることはできない。

在戦争中、情報局以無恥的戦争理念逼人接受⁽¹¹⁾、迎合者□有圧倒不迎合者の局勢。但少数の文学家一点也不驚訝⁽¹²⁾、一点也不改变面貌、冷然像是無関的様子、他們像是不看正在發生的事情。

從「伊豆の舞女」到「雪国」，再到「名人」⁽¹³⁾，川端康成以優美的抒情和銳敏的感覺，甚至對於極小的愛情也不忘記給以正確的描写。写過「聖家族」和「美麗的村莊」的堀辰雄，在為戰爭中俗臭噴噴的婦人雜誌写「大和路・信濃路」的時候，也只着眼於遙遠古代的人物和隱靜的自然，做出詩樣的文章⁽¹⁴⁾。那些作品固然極其軟弱，固然其消極而特殊，可是純潔他們以一貫的的偏狹，只写自家所喜歡的事情，有不触及可厭惡的事情的純潔。

戦争中、情報局が恥知らずにも戦争の理念をむりやり受け入

れさせたことで、迎合する者は迎合しない者を圧倒する傾向があつた。ただし、少數の文学者はすこしも驚かず、頗つきすら変えることなく、どうやら無関心な様子で冷然として、起きていることに眼を向けなかつた。「伊豆の踊子」から『雪国』や「名人」まで、川端康成は優美な抒情と銳敏な感覺によって、非常

に小さな愛情にさえ正確な描写を施すことを忘れていない。「聖家族」や「美しい村」を書いた堀辰雄は、戦争のために俗臭のぶんぶん匂う婦人雜誌に『大和路・信濃路』を書いた時でさえも、

ただ遙か遠い古代の人物や静かな自然にのみ眼を向け、詩のような文章を作り出した。そのような作品はむろん極めて弱々しいし、消極的で特殊であることを免れないが、しかし彼らの一貫した偏狹さはある種、純潔とさえ呼べるだろう。ただ自分の好きなことだけを書き、嫌悪することに触れずに済ませるという意味での純潔である。

横光利一在戦争中継続写大長編「旅愁」，和陸續湧現於腦海中的問題相周旋⁽¹⁴⁾。因此戰争這個大問題出現，和由此而生的急激的世界變貌，像是也使他改變了面貌。想從曾居巴黎的日本人思想感情回到日本人的傳統精神，這一野心頗有使他轉入反動的危險。但幸而他是「以人類以複雜而無弁法」的文学家之一。他是一個頑固的漢子，不管情報局的命令和迎合者的威嚇，把複雜的問題当作複雜的問題，一直分析，推斷到心理過得去為止。

為着想屢次發見，屢次驚訝的願望，他反而在本質上沒有動搖，

沒有変貌，以至今日。

横光利一は戦争中、大長編である『旅愁』を書き続けた際、脳裏を続々とよがる問題と格闘した。戦争という大きな問題の出現、およびそれに伴う急激な世界の変貌は、彼の状態を変えてしまった。かつてパリに仮住まいしていた日本人の思想感情から、日本人の伝統精神へと回帰した。この心情は、彼を反動的で危険な状態へと陥れた。しかし幸い、彼もまた「複雑で仕様がない」文学者の一人であることには変わりない。彼は頑固な男で、情報局の命令やそれに迎合する者の威嚇があつたにも拘わらず、複雑な問題をきちんと複雑な問題として分析し続け、自分が納得するまで推断を繰り返した。なんども発見をしてみたい、なんども驚いてみたいという願望のために繰り返される思考は、かえつて彼を本質的な動搖や変貌から守り、今日に至らせたのである。

但川端、堀、以及横光在今日都感到誘發內省的驚訝。他們能够改变面貌，獲得強韌而廣闊的成長。或許戰敗也不能像睡覺，喫飯，男女交接等根本事実一樣吸引他們的注意。但讀者却喫驚，變貌，成長着。作家有使其滿足的責任。誠然，到了夏天，永井荷風的『澤東綺譚』⁽¹⁴⁾的驟雨現在還會降落在東京的繁盛地點⁽¹⁵⁾。谷崎潤一郎的『小雪』今年冬季也要為大阪的天空添色罷⁽¹⁶⁾。再說上去，在茨城県的農村裡，長塚節的『土』中的農民一定帶着沈鬱的眼神在田地裡⁽¹⁷⁾。那些驟雨，雪和土不改面貌，同樣的春夏秋冬

來訪我們的山河。而作家們的全新的驚訝，作家們的火傷，是日本人民一齊身受心感的。一切的作家必須向這一點試用他們的潔癖。美，抒情，愛，甚至好惡之念，他們都要從新再看一遍。對於他們，與其說從新再看，不如說繼續看更為適當。

しかしながら、川端と堀、ならびに横光も、今日においては全員、内的な驚きを感じているはずだ。彼らの面貌には変化が、強韌で広闊な成長がもたらされる。敗戦は睡眠、食事、男女の交接といった根本的な事実ほど、彼らの注意を引き付けるものではないかも知れない。しかし讀者は驚き変化することで成長する。それに対し、作家は讀者を満足させる責任がある。なるほど夏がやつてくれれば、永井荷風の『澤東綺譚』の驟雨は、今でもまだ東京の盛り場に降り続いている。谷崎潤一郎の『細雪』は、今年の冬も大阪の空に色を添えずにはおかない。さらに遠くの方、茨城県の農村では、長塚節の『土』における農民はきっと田んぼの中で、沈鬱な目つきをし続けているだろう。驟雨や雪や土は相も変わらず、春夏秋冬と同じように私たちの山河にやつてくる。そのたびに作家らの全く新しい驚きや火傷を、日本人民が一齊に身をもつて受けとる。全ての作家にとつて、ここで潔癖を試すことは必須である。美や抒情や愛、また好惡についての考え方、彼らは見直すべきだろう。いや、彼らにとつては見直すというより、むしろ見続けるといったほうが適切だろう。

現実在日本一齊都成了世界的。世界光線的強度威脅而又保護文學的常事。最複雜的東西，最個性的東西也被放在亮處。最世界的個人主義，最個人的世界主義也許會從那裡發生。把泥土，砸石塊的手，着油膩，染塵污的胳膊，也許會代替旧的作家。那些也許是粗野而健康的。但這些作家們大約仍舊要說「但他們是卑鄙的，不，也許不卑鄙，但和我們是不同的」，輕視非文學的人罷。像日本的戰敗，屈辱和絕望成為世界的一樣，他們握手輕視變為世界的。

現実に、日本は一齊に世界のものとなつてしまつた。世界から放たれる光の強度は脅威だが、文學の日常を保護してもいる。それによつて、国内の最も複雜なもの、最も特殊なものが明るみに出されるだらう。最も世界的な個人主義、また最も個人的な世界主義はそこから生み出されるかもしれない。泥を掴み、石の塊を打つ、油の汚れがついており、埃で汚れた腕は、もしかすると旧時代の作家にとつて代わる。それは、粗野ではあるが健康である。しかし、このような作家はおそらく、依然として「しかし彼らは……卑しいぞ。いや、卑しくはないかも知れぬがおれたちとは別だ」と述べ、非文學的な人を輕視し続ける。敗戦した日本のように、屈辱と絶望は世界そのもののことであり、彼らは世界への輕視を掌中にするのである。

注

(1) 「小説の書けぬ小説家」のこと。中野重治の短編小説で、『改造』一九三六年一月号に発表された。転向後、執筆内容の制限によつて、思うように書けなくなつてしまつた小説家、高木高吉が、なんとか作品を産み出そうとする物語である。本稿では評論中で言及される単行本、中野重治『小説の書けぬ小説家』(一九三七、竹村書房)を底本とした。底本の書誌や内容に關しては、注4に記している。

(2) 伏字だらけの小説しか産み出せない高吉に対する批評家の厳しい同情的な意見が述べられた一節。底本では、一三頁から一四頁にかけて示されている内容である。泰淳の評論は鉤括弧の活字が正しく組まれていないため、直接引用と泰淳が内容をまとめて書いている部分の区別が困難だが、注を付した段落の前半は泰淳が内容をまとめた部分、注を付した段落の後半は中野の小説の直接引用と判断して訳出した。

(3) 「一つの小さい記録」のこと。中野の中短編小説で、『中央公論』一九三六年一月号に発表された。マルクス主義者である佐藤と周囲の仲間たちの微妙なずれ違いが、転向前後の行動を通じて描き出される。本稿では注1と同じ単行本を底本とした。引用箇所は、佐藤が佐久間という同志と連れ立つて、南というソビエト留学経験のある画家を訪ねた一節。下世話な話をする佐久間たちに佐藤は失望する。底本では、一三八頁から一三九頁にかけて示されている内容である。もともとの小説では、登場人物の名前は略されずに姓で書かれていたが、泰淳の評論ではアルファベットに変更

されている。本稿は小説本文に依りつつ、人物名のみアルファベットを用いて訳出した。

(4) 中野重治『小説の書けぬ小説家』(前掲)のこと。「この小説集が出版されてから、現在すでに一〇年が経つた」あるが、泰淳の評論が掲載された雑誌は一九四六年四月の出版であり、中野の単行本は一九三七年一月出版なので、正確には九年三ヶ月しか経っていない。ただし、引用される小説作品「小説の書けぬ小説家」と「一つの小さい記録」とは、ともに竹村書房の単行本が初収録であり、二作が同時に収録されている点から考えても、評論中で指示されているのは同単行本であると判断した。二作品とも一九三六年初頭の発表であるため、泰淳がその時期と初刊の刊行時期とを、曖昧に記憶していた可能性もある。

(5) 松下裕編『年譜』(中野重治全集)第二八巻、一九八〇、筑摩書房によれば、中野は戦後、一九四六年四月一〇日に行われた第二回衆議院選挙、同年六月一日に行われた同回衆議院選挙再選挙(得票数不足のため行わされた補欠選挙)、一九四七年四月二〇日に行われた第一回参議院議員選挙の計三回候補者になつてゐる。評論の掲載誌は一九四六年四月の発行であるため、泰淳

(6) 日本の普通選挙に関する話題は現地の新聞でもたびたび報じられていた。たとえば「日本普選昨挙行」(中央日報)一九四六・四・一)や、「三大党票数接近」(申報)一九四六・四・一二)など。ただし今回調査した範囲では、中野重治が衆院選の候補者となつたことを報じた記事は発見できなかつた。上海市年鑑委員会編『上海市年鑑』(一九四六、上海市通志館)の「日報一覧」を確認すると、現地では小規模のものを含めると、三〇紙程度が刊行されている。私見では、泰淳も記事を執筆したことのある国民党政府系の邦字新聞『改造日報』に中野に関する記事が掲載されている可能性が高いと考えられるが、衆院選前後の刊行分については国立国会図書館に所蔵されておらず、今回調査することができなかつた。

(7) 「倫敦塔」のこと。夏目漱石の短編小説で『帝国文学』一九〇五年一月に発表された。主人公が留学中一度だけ倫敦塔を見物したときの幻想的な印象を振り返る物語である。

(8) 『あめりか物語』と『ふらんす物語』のこと。どちらも、永井荷風によるオムニバス形式の作品。複数の雑誌に掲載されたものに書き下ろしを合わせて成立している。『あめりか物語』は博文館より一九〇八年に刊行され、『ふらんす物語』は同館より一九〇九年に出版納本された。ただ、後者は発売禁止処分を受けたため流通しておらず、その後一部内容を削除して刊行された新編版や全集版で初めて読むことが可能になつた。泰淳が読んだと

であり、一九四六年三月一二日から泰淳が帰国の途につくまでの数日間だと推測できる。

すれば、これらの刊本を通じてである可能性が高い。

(9) 「小説の書けぬ小説家」の一節。どうしても作品を書けない高吉が、参考に他作家の作品を読む場面。底本では、三五頁で示されている内容である。

(10) どのような性質の演説会における発言か未詳。泰淳の別評論「中國文学の命運」(『文明』一九四六・八)には、上海滞在時に小林と会見したことが明かされており、泰淳が直接に小林の発言を聴いた可能性もある。ちなみに吉田熙生「小林秀雄年譜」(阿部良雄ほか『小林秀雄』一九九一、小学館)によれば、小林は一九四三年一〇月から一九四四年六月まで、第三回大東亜文学者大会の準備のために中国へ渡っている。泰淳が上海の文化機関に勤めはじめたのは一九四四年六月からであるため、小林と泰淳が外地で会ったのは、同年六月頃と推定される。ただし、両作家の中国滞在については不明な部分も多いため、会見が別の時期に行われた可能性についても否定はできない。なお、泰淳は自伝的小説『上海の蛍』(一九七六・二・九)のなかで、小林と上海で面会した経験を回想している。

(11) 福島鉄郎「戦時言論統制機関の再検証「情報局」への道程」(『総合ジャーナリズム研究』一九八六・一、四、七)や、春原昭彦「戦前の言論統制」(『コミュニケーション研究』一九九六・三)が述べるように、言論統制は内務省や陸海軍省など各省庁がそれぞれに担当していたが、一九三六年に内閣情報委員会が設立され、その後一九四〇年に情報局が成立した。泰淳が「情報局」と述べる場合、情報委員会のことを指している可能性もある。なお、この

情報局は敗戦の同年一二月に廃止されたため、泰淳の評論が書かれた時点においては、すでに存在していない。

(12) 「伊豆の踊子」、『雪国』、「名人」のこと。「伊豆の踊子」は『文芸時代』一九二六年一月号と二月号に分載された。一高生と旅芸人の踊子の淡い思慕を描いた作品である。『雪国』は複数の雑誌に掲載された内容をまとめて、一九三七年に創元社より刊行された。後に決定版も出ているが、時期的に考えて泰淳が言及したのは、戦時下刊行の初刊と推定される。無為に日々を過ごす島村と、温泉の芸者である駒子との恋愛物語。「名人」の成立事情は複雑であるが、泰淳が見たものとして想定されるのは「名人」(川端康成編『八雲』第一集、一九四二、小山書店)か。碁の名人、本因坊の引退碁を記した観戦記形式の物語である。

(13) 「聖家族」、「美しい村」、「大和路・信濃路」のこと。「聖家族」は堀辰雄の短編小説で、『改造』一九三〇年一月号に発表された。九鬼という人物の突然死と、彼をめぐる三人の男女の恋愛関係を描いた物語。「美しい村」は中編小説で、一九三三年六月二五日、『大阪朝日新聞』朝刊に冒頭部分が掲載された後、他雑誌で公にされたものと合わせ翌年、野田書房より『美しい村』としてまとめられた。失恋で傷ついた青年作家が自然に囲まれた生活を通じ活力をとり戻す物語。『大和路・信濃路』は、一九四三年一月から八月にかけて『婦人公論』に連載された。奈良、長野への旅行を題材としたエッセイ作品。

(14) 『旅愁』のこと。横光利一の長編小説で『文藝春秋』などに一九三七年から戦後にかけて連載された。前半は主人公のヨー

ロジバでの恋愛が、後半は帰国してからの思索生活が描かれた作品。評論が書かれた時点では読むことが可能だったのは『文藝春秋』一九四五年一月号に発表された第五編第三回までと考えられる。(15)『澤東綺譚』のこと。永井荷風の中長編小説で、『東京朝日新聞』および『大阪朝日新聞』夕刊紙上で一九三七年四月一六日から六月一五日にかけて連載され、同年に岩波書店から単行本が刊行された。大江匡と、玉の井の私娼お雪との交情が描かれた物語である。

(16)『小雪』とあるが、『細雪』のことではないかと推定される。『細雪』は谷崎潤一郎の長編小説で上中下巻が存在するが、敗戦以前に刊行されたのは、一九四三年一月号と三月号に『中央公論』に連載された分と、掲載自肅を受けて一九四四年に配布された私家版とがある。泰淳が読んだのは前者である可能性が高い。船場の旧家蒔岡家の四姉妹の生活が描かれた物語である。

(17)『土』のこと。長塚節の長編小説で、一九一〇年六月一三日から一月一七日にかけて、『東京朝日新聞』に連載された。茨城県鬼怒川べりの農村を舞台に、小作農たちの生活が描かれた物語である。

【付記】資料の公開に当たって、泰淳のご息女である武田花様より、格別のご配慮を賜った。また、資料は北京大成数据有限公司・北京超星公司作成のデータベースである、「大成老旧期刊全文数据庫」を使用して閲覧した。これは、狭義の中華民国期に刊行された哲学、人文科学、自然科学、教育関係の雑誌およそ六五〇〇種

を収録するものである。データベースは五つの部分から成るが、本稿で扱った資料掲載の雑誌は、そのうち大成小庫D（政治、法律、軍事）に収録されている。確認した範囲では、慶應義塾大学や京都大学が契約しており、論者は学外者ながら、後者機関のご厚意によってその調査が可能となつた。また訳出の際、原文のニュアンスや文法の微細な点について、林麗婷氏や穆彦姣氏に多くの点でアドバイスを頂戴した。各氏・各館に、心より感謝申し上げる。